

ヨハネの手紙第三

アウトライン

1. 序文 (1-4 節)
2. 巡回伝道者へのもてなし (5-8 節)
3. デオテレベスについての警告 (9-10 節)
4. デメテリオについての指示 (11-12 節)
5. 結語 (13-15 節)

結論：ヨハネの手紙第三の現代的適用

1. 教会における権威の問題
2. 巡回伝道者へのもてなし：地域教会を超えた一体感という祝福

1. 序文 (1-4 節)

1 節：長老から、愛するガイオへ。私はあなたをほんとうに愛しています。

2 節：愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります。

3 節：兄弟たちがやって来ては、あなたが真理に歩んでいるその真実を証言してくれるので、私は非常に喜んでいます。

4 節：私の子どもたちが真理に歩んでいることを聞くことほど、私にとって大きな喜びはありません。

1. 著者：長老＝使徒ヨハネ

- (1) 多くの学者が、第三の手紙と第一・第二の手紙の文体や内容には類似点があると指摘している。
- (2) 紀元3世紀には第三の手紙の著者も使徒ヨハネであると理解されていた（エウセビオス『教会史』第VII巻25章）。

2. 宛先：ガイオ

- (1) パウロと関係のある人物として、この名前は何度か新約聖書に登場している（使19:29；20:4；ロマ16:23；1コリ1:14）。しかし、同一人物かどうかは不明。
- (2) この手紙の宛先のガイオは、ヨハネが「ほんとうに愛して」いる人物である（2節）。

(3) 「真理に歩んでいる」、つまり御言葉を実践している人物である (3-4 節)。

(4) ガイオの行いは、ガイオの信仰を確証するものである。

(5) 恵みによる信仰と行いのサイクル

信仰が行いとして現れる → 信仰の確証が与えられる

↑

↓

信仰が深められる ← 信仰の確証に基づく喜び

(6) 彼は信仰と行いのサイクルによって、「たましいに幸いを得ている」(新共同訳「魂が恵まれている」)

3. 執筆の目的：ガイオに巡回伝道者のもてなしを命じるため

(1) 第二の手紙の主題は、異端の巡回伝道者をもてなしてはならないという禁止命令だった。

(2) 第三の手紙の主題は、まことの信仰を持つ巡回伝道者をもてなすようにという積極的な命令である。

(3) ガイオがいた教会では、指導者であるデオテレペスがヨハネの権威に反抗し、巡回伝道者へのもてなしを拒否していたようである (9-10 節)。

(4) ヨハネは、デオテレペスに屈せずもてなしの働きを続けるよう、ガイオに指示している。

(5) 11-12 節ではデメテリオという人物が唐突に取り上げられている。もしかしたら、手紙の本来の趣旨は、ガイオに対してデメテリオを推薦し、彼をもてなすよう指示することだったのかもしれない。

2. 巡回伝道者へのもてなし (5-8 節)

5 節：愛する者よ。あなたが、旅をしているあの兄弟たちのために行っているいろいろなことは、真実な行いです。

6 節：彼らは教会の集まりであなたの愛についてあかししました。あなたが神にふさわしいしかたで彼らを次の旅に送り出してくれるなら、それはりっぱなことです。

1. ガイオがもてなした巡回伝道者たちが、ヨハネの教会でガイオの愛ある行いを証した。

(1) クリスマスは兄弟姉妹をもてなすように、という命令は、パウロの手紙においても、ペテロの手紙においても、ヘブル人への手紙においても見られる (ロマ

12:13；1ペテ 4:9；ヘブ 13:2)。

(2) 「もてなし」 = 「フィロクセニア」。「よそから来た人たちへの愛」という意味。

(3) マタイの福音書 10:40-42：真実なもてなしの例

40 節 **あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです。**

41 節 **預言者を預言者だというので受け入れる者は、預言者の受ける報いを受けます。また、義人を義人だということで受け入れる者は、義人の受ける報いを受けます。**

42 節 **わたしの弟子だというので、この小さい者たちのひとりに、水一杯でも飲ませるなら、まことに、あなたがたに告げます。その人は決して報いに漏れることはありません。**

2. ヨハネは、ガイオがもてなしの働きを継続するよう期待している。

(1) ガイオのもとに新たな巡回伝道者を派遣する機会を考えていたのかもしれない。

(2) デオテレペスが旅人のもてなしを禁じてしまい、ガイオがもてなしの働きを続けることができなくなった、という背景が示唆されているのかもしれない。

3. もてなしの継続は「神に喜ばれる」ことである（新共同訳）。

(1) イエスによって遣わされた使徒たちを受け入れる者は、イエス自身を受け入れたことと同等に見なされた（マタ 10:40-42）。

(2) 今は信仰者がキリストのからだの一部とされた恵みの時代である。同じキリストに属する兄弟姉妹を受け入れ、もてなすことは、御言葉に則ったクリスチャンにふさわしい行いである。

7 節：**彼らは御名のために出て行きました。異邦人からは何も受けていません。**

8 節：**ですから、私たちはこのような人々をもてなすべきです。そうすれば、私たちは真理のために彼らの同労者となれるのです。**

1. 巡回伝道者たちの目的は「御名のため」である。

(1) 巡回伝道者たちは、イエスの御名の素晴らしさのゆえに、その御名を宣べ伝えるために出て行った。

2. 「異邦人」について

(1) 訳文の比較

新改訳、新共同訳：異邦人

NIV、CSB：異教徒

NRSV、NLT：不信者

(2) 新約聖書で異邦人（ユダヤ人以外の人々）を指すときは、一般的に「エスノス」という言葉が使われている。しかし、ここでは「エスニコス」という言葉である。

(3) イエスは山上の垂訓の中で異邦人を指して「エスニコス」を使っている（マタ5:47；6:7）。そこでの強調は彼らの「民族性」よりも、彼らが「異教徒」であるという点にある。

(4) したがって、第三ヨハネの「エスニコス」は「異教徒」と訳した方が良いだろう。

(5) 異教徒は、旅の道中で寄付金を集めることを誇りとしていた（例：あるシリアの女神の“奴隷”の記録）

(6) クリスチャンの旅人は、原則としてノンクリスチャンからの援助を請うような姿勢は取らなかった。（ジョン・ストット）

3. 巡回伝道者をもてなすことの意義

(1) 「もてなす」＝「ヒュポラバネイン」。「助ける」とも訳せる（新共同訳）。

(2) 巡回伝道者たちの霊的・物質的必要は、同じキリストの体に属する私たちによって援助され、満たされるべきである。

(3) 巡回伝道者たちは神の栄光のために働いている。彼らを助けることによって、私たちは真理のため、また神の栄光のために「彼らの同労者となれる」。

3. デオテレペスについての警告（9-10節）

9節：**私は教会に対して少しばかり書き送ったのですが、彼らの中でかしらになりたがっているデオテレペスが、私たちの言うことを聞き入れません。**

10節：**それで、私が行ったら、彼のしている行為を取り上げるつもりです。彼は意地悪いことばで私たちをののしり、それでもあきたらずに、自分が兄弟たちを受け入れないばかりか、受け入れたいと思う人々の邪魔をし、教会から追い出しているのです。**

1. デオテレペスの反抗

(1) 「かしらになりたがっている」＝「フィロプロウテウオーン」。この言葉には「指導者などの高い地位につくことを熱望している」というような意味合いがある。

- (2) デオテレペスは教会の中で指導者になることを熱望し、使徒ヨハネの権威に反抗したようである。
- (3) 巡回伝道者たちとは対照的に、デオテレペスの熱望は神の栄光のためではなく、自分自身の栄光のためだった。
- (4) 「意地悪いことばで……ののしり」とは、デオテレペスがヨハネに対して、悪意の込められた意味のない中傷を投げつけていたという意味だろう。
- (5) デオテレペスのヨハネに対する反抗は、ヨハネが求めてきた巡回伝道者のもてなしの禁止となって現れたようである。
- (6) また、デオテレペスはもてなしをしようとする人々を教会から追放していたようである。

4. デメテリオについての指示 (11-12 節)

11 節：愛する者よ。悪を見ならわなさい、善を見ならいなさい。善を行う者は神から出た者であり、悪を行う者は神を見たことのない者です。

12 節：デメテリオはみなの人からも、また真理そのものからも証言されています。私たちも証言します。私たちの証言が真実であることは、あなたも知っているところです。

1. 悪を見ならわなさい、善をみならいなさい (11 節)。
 - (1) 「善を行う者は神から出た者であり、悪を行う者は神をみたことのない者です。」
 - (2) 救いに関する道徳的検証 (救いの確証は神のことばを守ることによって得られる) の内容を繰り返している。(1ヨハ 2:3-6、28-29；3:4-10 参照)
 - (3) ヨハネはガイオに救いの確証を思い起こさせ、良い行い (巡回伝道者へのもてなし) を継続させようとしている。

2. デメテリオの推薦 (12 節)
 - (1) 「善を行う者」の例として、デメテリオの名が挙げられている。
 - (2) デメテリオが「善を行う者」であることを証明する者として、3人の証人 (みなの人、真理そのもの、私たち) が挙げられている。
 - (3) ヨハネはデメテリオをもてなすよう、ガイオに依頼するためにこの手紙を書いた可能性が高い。

5. 結語 (13-15 節)

13 節: **あなたに書き送りたいことがたくさんありましたが、筆と墨でたくはありません。**

14 節: **間もなくあなたに会いたいと思います。そして顔を合わせて話し合しましょう。**

15 節: **平安があなたにありますように。友人たちが、あなたによろしくと言っています。そちらの友人たちひとりひとりによろしく言ってください。**

1. 「平安があなたにありますように。」(15 節 a)
 - (1) ヘブル語の「シャローム」という挨拶に対応しているのだろう。
 - (2) ガイオは困難な状況下に置かれていた (9-10 節)。彼は神ご自身から与えられる「平安」を必要としていた。
 - (3) ヨハネの挨拶は、しっかりとガイオの状況に適った「ふさわしい祈り」であった (ジョン・ストット)。

2. 「そちらの友人たちひとりひとりによろしく言ってください。」(15 節 c)
 - (1) ヨハネは、交わりの中で「友人」と呼べる関係にある兄弟姉妹を得ていた。
 - (2) 教会とは人々の集まりであり、そこで求められているのは交わりである。
 - (3) 「友人たちひとりひとりによろしく言ってください」は、直訳すれば「友人たちに名前を呼んであいさつをしてください」という風な文章になる。離れたガイオの教会における「友人たち」に対するヨハネの愛情が示されている。
 - (4) 地域教会を超えて「友人 (フィロス)」と呼ぶことのできる兄弟姉妹を持つクリスチャンは、お互いがキリストに属する兄弟姉妹であるという真理を体現できている。そのようなクリスチャンは、幸いなのだといえるだろう。

結論：ヨハネの手紙第三の現代的適用

1. 教会における権威の問題 (9-10 節)
 - (1) デオテレペスは自らの欲望により、主が使徒に与えられた権威に反抗した。
 - (2) パウロは、ローマ皇帝の権威すら神がお与えになったものだと教えている (ロマ 13 章)。いかなる権威も神から与えられるものである。
 - (3) 地域教会で立てられている牧会者や長老たちも、原則的には神がお立てになった人物である。

〈1ペテ 5:5-6〉

「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身につけなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。」

- (4) 教会は目に見える地上の組織／共同体であると同時に、キリストを頭とした「新しいひとりの人」である（エペ 2:15）。牧会者たちは、キリストの体を建て上げるために主によって立てられている。
- (5) 原則的には、私たちは神が牧会者としてお立てになった人々に容易に反抗すべきではない。
- (6) 自分たちの教会における牧会に反発を抱いた場合、その心が自分の欲望から出たものなのか、それとも御霊から来たものなのか、御言葉の学びと祈りの中でよく吟味する必要がある。

2. 巡回伝道者へのもてなし：地域教会を超えた一体感という祝福（7-8節）

- (1) 当時の異教徒は、旅の途上、仕える神の名の下で寄付金を得ることを「御利益」としていた。また、寄付金を与える者も「御利益」にあずかるとされていた。
- (2) クリスマンをもてなすことによる祝福は、御利益信仰を促すものではない。
- (3) 現代でも伝道旅行で要する物的必要は、少ないものではない。旅をする当事者も、伝道者を送り出す者も、その必要を負担することは容易ではない。
- (4) 送り出される側は、自分で負担を担うことをまず覚えるべきである。もし必要が満たされずとも主の御名のために出て行かなければならないなら、その必要を、主がご自分のみからだ（クリスマン）を通して満たしてくださるだろうという希望を持つことが原則であろう。
- (5) 迎える側あるいは送り出す側は、相手の霊的・物的必要を満たすことを、自分たちが担っている重荷として覚えるべきであろう。
- (6) 兄弟姉妹をもてなすことは、私たちがキリストの体としてひとつであるということを実感させてくれる。
- (7) 経験談：第一ヨハネ連続講義で訪れた千葉県 T 教会にて